

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。そのゆえは、一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり。いずれもいずれも、この順次生に仏になりて、たすけそうろうべきなり。わがちからにてはげむ善にてもそうらわばこそ、念仏を回向して、父母をもたすけそうらわめ。ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだ、いずれの業苦しずめりとも、神通方便をもって、まず有縁を度すべきなりと云々

第4組 生振寺住職

白山 敏秀

text by Toshihide Shirayama

第5章「朋なる救い」

宗祖親鸞聖人750回御遠忌法要。750年前、聖人亡き後末娘覚信尼が、在りし日の聖人から唾のかかる距離で教えを受けた面授の輩との生きいきとした語らいを偲んで建立した本廟で行われた行事が750回繰り返されたということである。御命日が近づくとこの木廟に集った二代如信はじめ多くの面授の輩は、懐かしく互いに聖人の言葉を確かめ合い、聖人にあつたことのない者が訪ねてくると、そろって、命懸けで頭を下げた。「頼むから親鸞聖人に遇ってくれ」と。面授の輩の命絶える20年~30年の間の熱き法要「報恩講」は、その命懸けのエネルギーゆえに750回目の大きな節目を迎えることができた。

本願寺三代覚如は聖人亡くなりし後、9年目にして誕生した人である。ゆえに彼は面授の輩ではない。そのことを憂えた唯円は覚如が18歳になるのを待つて関東から上格し覚如の前で頭を下げた。「頼むから親鸞聖人に遇ってくれ」その時に伝えた聖人との出遇い・語らいが歎異抄であつたと思われる。他の書がその筆者の心根になつて初めて真に読み得るが如く、歎異抄は聖人に出遇い、聖人のつばきを感じながら、聖人と語らい、ついには聖人になりて初めて真に読み得たと言える感動の報恩講の書なのである。

そうであるならば、全ての章は唯円と聖人との呼応の世界である。この五章も「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。」との応答の前に唯円の真剣なる問いがあつたはずである。「師よ、

私は亡き父母が心配でなりません。私の称える念仏で父母を幸せにすることはできるでしょうか。」この問いは私も含め、わが寺の御門徒の方々の共通した念仏への期待と迷いなのだろう。

そこにどこまでも深い自我の闇を見る。自分を救わんとする仏願をもわたくしし、わが思いを叶えんとする手立てにしていく。そこには私につながる者達が救われることによって、私の人生の足を引っ張りませんようにという傲慢ささえ垣間見えるようだ。挙句の果ては、「住職、三年も月参りしたからもう止めていいんでないか。」何がしたいのだろうか。おそらく化けて出てこないだろうということか。どこまでもわが思いに振り回されていく。

聖人は父母のために念仏を口にした、カラッポだった長い昔を懐かしみつつ、念仏の呼び声に生きる身となりてからは一度も、その念仏をわたくししたことはないと言い切る。全ての人間はなるほど繋がりあって生きるものであるが、私が念仏にはからわれて生きる以外に父母兄弟と共に真に救われていく道はないのだ。それどころか父母兄弟ということすらないのだ。

観経序文の散善顕行縁で、章提希夫人が釈尊の導きで阿弥陀の浄土に生まれたいと願うとき速く離れた七重の牢獄中の夫、頻婆娑羅王（それは出ることも他からの呼びかけも入るを許さない自我の牢獄に座す我々そのものである）が仏道に目覚めるとされるが、一人の念仏者の誕生は、有縁の一切の自我に迷う者を仏道に立たしめるに足る事柄なのであろう。念仏に生きて気が付けば、すでに父母も兄弟も自我を超えて念仏に呼ばれて歩みし往生人であったという領きが御同朋御同行の真実を見出した。それはまた一人の念仏者の目覚めが全人類を担う（僧宝）最高の責任者・独立者を誕生させたことを表わす言葉である。

長いこと通っている同朋の会の会員から「先生、実は私癌なのです。」と告白されたことがあった。その後、自分の立っている所が激しく揺さぶられる思いがした。見渡せば、通ってこられる会員の方々は暇つぶしに来られる人など誰一人いない。老いの苦しみに立ち、病の苦しみに立ち、死ねない苦しみに立ち、今聞かなければ、今遇えなければもうだめだという命懸けを持ち寄っているこの場であると知った時、私は何を語ればいいのか。この方々の生き様が私を仏道に立たしめる。そう感じさせていただいた。